

令和元年6月13日現在

機関番号：16401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770102

研究課題名(和文)19世紀英詩における同時代主義と懐古主義の相克

研究課題名(英文)Conflict between Victorianism And Antiquarianism in the Nineteenth-Century Poetry

研究代表者

関 良子 (Seki, Yoshiko)

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授

研究者番号：10570624

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀英国の詩および詩論に表出される歴史観を、懐古主義と同時代主義のダイナミズムの中で検証した。従来、この歴史観は中世主義・中世趣味の概念のもとに検討される傾向にあったが、それゆえ前後の時代を扱う詩や詩論は看過される傾向にあった。本研究ではそれらを含めた歴史観を「懐古主義」と捉え、古典詩の翻訳をめぐる議論やペイターのルネサンス論も検討の範囲に入れ、研究を行った。その結果、懐古主義には同時代への関心も多く含まれることが判明した。また、19世紀歴史学での歴史観と懐古主義とを比較検討することで、19世紀英国詩人らも、当時の歴史学者らと同様の問題意識を有していたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、中世文学研究の延長でこれまで考察されてきた中世主義と、ヴィクトリア朝文学研究の一側面としてこれまで認識されてきた19世紀文学における歴史観について、「同時代主義と懐古主義の間の相克」というダイナミズムの中で吟味した。

文学や文化に表出される歴史認識は、当時の文人らの精神に歴史がどのようにかかわっていたかを表すものであり、記録される歴史には残されない情報も含まれる。本研究は、そのような文人らの歴史観を「懐古主義」の中に見出し、彼らがその概念にどのような価値観を付加していたかを解明することにより、ヴィクトリア朝文学・文化における歴史観をめぐる研究動向に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)： This project focuses on historical imagination represented in nineteenth-century English poems and poetics, and finds in them the conflict between Antiquarianism and Victorianism. Traditionally the emphasis on sensibility and themes commonly associated with the Middle Ages was defined as “Medievalism”; but if we use this term, the attitude which is similar to it but belongs to different eras will be ignored. For this reason, I redefined such attitude by the term “Antiquarianism” and analyzed Matthew Arnold’s discussion on the translation of Classics and Walter Pater’s *Renaissance* along with several Medievalist poems. I also scrutinized Haydn White’s *Metahistory* and compared what he defined as “historical imagination in the nineteenth-century European historiography” with the poems and poetics of the contemporary Medievalist poets in Britain.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：ヴィクトリア朝 詩学 懐古主義 中世主義 ヴィクトリアニズム William Morris Walter Pater M atthew Arnold

1. 研究開始当初の背景

本研究と共通要素のある研究動向には、大きく分けて二つの流れがある。一つは中世主義の分野からのアプローチ、もう一つはヴィクトリア朝文学・文化における歴史観についての考察である。前者に関して、中世主義は1970年代から特にアメリカで注目され始め、学術雑誌 *Studies in Medievalism* と年次国際学会を基軸に研究が進められているが、近年の出版物を見ても明らかとなっており、用語の定義すら定着していない状況にある¹。その要因は二つあり、一つはこの研究領域が中世文学を専門にする研究者の注目を得るばかりで、近現代文学の研究者からの考察が十分ではなく、結果的に中世主義を自明の事象と捉え、「現実の中世」と後世に「創造された中世」の異同に焦点を当てた研究に集中していたからである。第二の要因は、中世主義研究の確立に寄与した上記学術雑誌・学会が、中世主義の対立概念として古典主義を据え、「古典主義と中世主義のダイナミズム」の中で中世主義を捉えようとしていた点にある。しかし、既述したように、従来の研究で中世主義詩人に属するとみなされた詩人らは、厳密に中世だけに固執していたわけではなく、古典的な主題も大いに取り入れている。そのような背景を考慮し、本研究では中世・古典どちらをも含む概念として「懐古主義」を捉え、これまでの中世主義研究とは異なるアプローチから19世紀英詩研究を行った。

また、研究動向の第二の流れ（ヴィクトリア朝文学・文化における歴史観）についても、いくつか代表的な先行研究がある。例えば Hayden White (1973) が19世紀ヨーロッパ文化に見られる歴史的想像力を“Metahistory”という用語で表現するのに対し、A. Dwight Culler (1985) はヴィクトリア朝時代の文人たちが目指した歴史構築は“myth”でも“truth”でもなく“belief”なのだと言主張するといった具合である²。これらの研究が国内外で多く発表され、そのどれもが意見の一致を見ず、ヴィクトリア朝文学における歴史観が概念として定着しないのには、文学における歴史認識が歴史分野でいう歴史認識とは一致しないために、適切な定義づけがなされづらいという事情がある。

先行研究のこうした背景を鑑み、本研究では19世紀イギリスの詩および詩論に表出される歴史観を、「懐古主義」(Antiquarianism)と「同時代主義」(Victorianism)の相克というダイナミズムの中で吟味した。

【注】

¹ Pugh, Tison & Angela Jane Weisl, *Medievalisms: Making the Past in the Present*. London: Routledge: 2013. / D'Arcens, Louise. editor. *The Cambridge Companion to Medievalism*. Cambridge University Press, 2016. / Utz, Richard. *Medievalism: A Manifesto*. Kalamazoo: Arc Humanities Press, 2017.

² White, Hayden. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1973. / Culler, A. Dwight. *The Victorian Mirror of History*. New Haven: Yale UP, 1985. p.7.

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀英詩および詩論に見られる「同時代主義」(Victorianism)と「懐古主義」(Antiquarianism)の対立を吟味し、当時の詩人・思想家が共通にもっていた認識の所在、両立場の対立の根源、この対立・相克によって生まれた効果、を明らかにすることにある。

本研究の出発点として、「同時代主義」(Victorianism)と「懐古主義」(Antiquarianism)という二つの概念を定義することが重要である。J・S・ミルがエッセイ『時代精神』(*Spirit of the Age*, 1831)の中で、当時を「過渡期」(an age of transition)と捉え、「過去の教義が廃れ、新しい教義が未確立な現在においては、各人がそれぞれに判断を下さなければならない」と言ったことは有名である¹。同エッセイの中でミルは、当時の知識人を「現在の人」(the men of the present)と「過去の人」(the men of the past)に区分し、「時代精神は前者にとって歓喜の対象、後者にとっては恐怖の対象である。そして、双方にとって切望すべき関心事である」と述べている(p.228)。

本研究が出発点とするのはミルのこの指摘である。本研究では、前者を「同時代主義」(Victorianism)、後者を「懐古主義」(Antiquarianism)と定義し、考察する。このような二項対立を中心に据えることは、一見すると現代の研究動向に逆行するようにみえるかもしれないが、二項対立的図式に立ち返って考察することで、従来の研究では取りこぼされていた、両概念の間にあるダイナミズムを明白にすることが可能だと考える。また、本研究の特徴の一つに、Antiquarianism という用語を「懐古趣味」ではなく「懐古主義」と捉える点がある。19世紀詩人が古典や中世のテーマを扱うときの姿勢に、従来の訳語にある「趣味」ではなく、「主義」としての積極的な態度が存在することを、代表的な詩人の思想・作品を精査することで実証する。

【注】

¹ Mill, John Stuart. *Collected Works of John Stuart Mill*. Ed. Ann P. Robson and John M. Robson. Vol.22. 33 vols. Toronto: U of Toronto P, 1986. p.239, p.245

3. 研究の方法

- (1) 本研究のキー概念である「同時代主義」と「懐古主義」においてアンビヴァレントな立場をとっていたマシュー・アーノルドに関して、彼の思想と詩作品の両方を分析する。
- (2) アーノルドの散文執筆家・文芸批評家としての最初期の論考である『ホメロス翻訳について』と、それを中心に起こった、1860年代の古典詩翻訳をめぐる議論を調査する。
- (3) 国際中世主義学会の大会に出席し、中世主義の最新の研究動向に触れるとともに、中世主義学会設立の背景などを調査する。
- (4) 本研究課題に関連する単著 *The Rhetoric of Retelling Old Romances* を刊行する。
- (5) 評論『ルネサンス』や小説『享楽主義者マリウス』等の印象ゆえか、あまり中世主義研究の文脈で論じられてこなかった、ウォルター・ペイターに注目し、彼の思想に見られる懐古主義的特徴を精査する。
- (6) 歴史研究の分野に中世主義がどのように位置付けられうるかを検証すべく、ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』を精読し、19世紀イギリス詩人らの懐古主義的な詩と、同時代の大陸ヨーロッパの歴史家らの歴史記述との間に共通項が見られるか否かを検証する。
- (7) ウィリアム・モリスの中世主義的な詩に見られる、彼の懐古主義思想の特徴を調査する。

4. 研究成果

- (1) 「研究の方法 (1)」に関して、詩人としては中世主義者あるいは懐古主義者と捉えられる傾向にあるマシュー・アーノルドの思想の中には、同時代主義的な要素が多く含まれていること、そして散文エッセイにおいてはとりわけその傾向が強く見られることが判明した。
- (2) 「研究の方法 (2)」に関して、『ホメロス翻訳について』においてアーノルドが古典詩を六歩格の韻律で翻訳するよう主張している点は、一見すると古典叙事詩のリズムに立ち戻るよう主張しているようだが、実際にはロマン派からの離脱、ヴィクトリア朝詩学の確立を目指す同時代主義的営為でもあったことを解明した。この研究成果は、共著『英語のデザインを読む』（英宝社、2015年）で公表した。
- (3) 「研究の方法 (3)」に関して、2014年10月にアメリカ・ジョージア工科大学で行われた中世主義学会の第29回国際大会に出席し、海外の研究者らと本研究課題について議論した。また、同学会の設立当初から関わっている学会員より、学会設立の背景などを聴取することができた。
- (4) 「研究の方法 (4)」に関して、2015年2月に単著 *The Rhetoric of Retelling Old Romances* を英宝社より刊行した。本書はその後、*Medievally Speaking* (International Society for the Study of Medievalism)、*Journal of William Morris Studies* (William Morris Society)、*Perspicuitas* (Universität Duisburg-Essen)、『ヴィクトリア朝文化研究』（日本ヴィクトリア朝文化研究学会）、『英文學研究』（日本英文学会）等の学術雑誌で書評されたほか、学界動向 (Year's Work) として *Victorian Poetry* 誌 (West Virginia UP)、『英語年鑑』(研究社)、*The Year's Work in English Studies* 誌 (Oxford UP) で紹介されており、本書をきっかけに国内外の研究者と活発な学術交流をすることができた。
- (5) 「研究の方法 (5)」に関して、ウォルター・ペイターの『ルネサンス』論を精査することで、彼が何度も“Renaissance within the limits of the middle age itself”という表現を使っていることが判明した。これを論拠とし、ルネサンスの特徴とみなされる人間精神の解放等が中世の時代に既に始まっていたと指摘することで、ペイターが中世擁護の立場を取っていることを証明した。そして、既存の研究では19世紀の中世主義を古典主義の対立概念として捉えられてきたことの弊害として、ペイターの立場の細部が見落とされてきたことを指摘し、懐古主義として捉えなおすことの重要性を主張した。この研究成果は、2017年7月にオーストリア・ザルツブルク大学で行われた第32回国際中世主義学会で発表した。
- (6) 「研究の方法 (6)」に関して、ヘイドン・ホワイトが『メタヒストリー』で分析する19世紀大陸ヨーロッパの歴史家らの歴史記述に対する姿勢と、19世紀英国詩人らの歴史的なモチーフに対する姿勢には共通するところがあり、両者ともに同時代の社会への問題意識を有していたことが明らかになった。この研究成果は2018年12月に神戸女学院大学で行われた第13回日本英文学会関西支部大会で発表した。中世主義はこれまで、歴史文脈から切り離すところから議論が始められ、歴史言説の文脈で議論されることがなかったため、本研究発表を通して中世主義研究に新たな光を当てることができたのではないかと考える。

- (7) 「研究の方法 (7)」に関して、ウィリアム・モリスの円熟期の作品『愛さえあれば』という劇詩を分析し、モリスが詩の聴覚的・視覚的效果を駆使して中世世界の再現を試みており、また単に懐古的に再現するだけでなく、彼の後期の社会運動にも繋がるような、同時代的な意識をもって取り組んでいることを突き止めた。この研究成果は、2019年5月に安田女子大学で行われた第91回日本英文学会全国大会でのシンポジウム「詩人ウィリアム・モリスを読み直す」にて公表した。
- (8) その他の研究成果として、本研究に関連する近刊学術図書 *Phillippa Bennet's Wonderlands: The Last Romances of William Morris* (Peter Lang, 2015)の書評を、日本英文学会の全国誌 *Studies in English Literature* Vol.59 に発表した。本書が現象学の手法を取りながら、これまで別々に論じられる傾向の強かった、モリスの業績の2つの側面(社会主義者としての側面とアーツアンドクラフツ運動の主導者であり、ロマンス作家であるという側面)を結び付けての議論を試みているという点で優れた学術図書であることを評した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Seki, Yoshiko “*Wonderlands: The Last Romances of William Morris* by Phillippa Bennett (review).” *Studies in English Literature* (English Number) 59 (2018): 61 – 66.

〔学会発表〕(計 3 件)

関良子 「詩人モリスの作詩法—*Love Is Enough* を題材に」第91回日本英文学会全国大会(シンポジウム) 2019年

関良子 「歴史言説からの19世紀中世主義の再理解」第13回日本英文学会関西支部大会、2018年

Seki, Yoshiko “Late-Medievalism or Post-Medievalism: Medieval Ethos in Walter Pater’s *Renaissance*. The 32nd International Conference on Medievalism, 2017.

〔図書〕(計 2 件)

Seki, Yoshiko *The Rhetoric of Retelling Old Romances: Medievalist Poetry by Alfred Tennyson and William Morris*. Eihōsha, 2015. x + 195 pp.

米本弘一、沖田知子、関良子、他17名、英宝社「韻律のデザイン—ホメロスの英訳をめぐって—」、『英語のデザインを読む』、2015年、pp.93–105.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者
なし

(2) 研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。